

But, except, except for
 — 例外表現をめぐって* —

五十嵐 海 理

1 問題

例外を表す表現はいくつか存在する。ここで取り上げるのは、(1a)と(1b)にある *except, but, except for* の三つである。これらの表現については小西(1976)で記述的な一般化が述べられている。(1)の括弧内は類似表現として小西(1976)が挙げているものである。*Except*と*except for* がどう違うのか、という疑問について小西(1976)は、(2)や(3)の例から、(4)のように結論する。

- (1) a. *except, but* [excepting, save]
 b. *except for* [save for, with the exception of, apart from, aside from]
- (2) a. The house was deserted {*except for*/**except*} a baby in the cradle.
 b. He was naked {*except for*/**except*} a shirt.
- (3) a. There was no one in the house {*except/but*} a baby in the cradle.
 b. He has nothing on {*except/but*} a shirt.
- (4) a. *except* は語修飾 (←*except* は前の名詞と修飾関係にある)
 (ただし*except that* の時は文修飾)
 「*except* は常に*every, any, no* (またはこれらを含む語), *all, each* などとともに用いられ」る。(p. 174)
 b. *except for* は文修飾で、通例肯定文につく。*Most* がつく名詞句がある場合は、*except for* は良いが、*except* は共起しない。
- ((1)~(4): 小西1976: 171-176)

(4)にあるように、語修飾の *except* の例(3)を見てみると、全称量化詞のついた名詞句の修飾ばかりである¹⁾。従って、(4)で *except* や *except for* の話は尽きている、と考えることも出来る。つまり、(5)のような一般化より他に、言うべきことはないように思えるのである。

- (5) *except* と *except for* はどちらも引き算：
 a. *except*は*every, any, no* (またはこれらを含む語), *all, each*などの全称

量化詞の示す集合から引き算できる

[cf. connected exception phrases; Hoeksema 1987]

b. except forはmostなどの数量詞からも引き算できるが、

*some...except forなどはできない

[cf. free exception phrases; Hoeksema 1987]

しかし、コーパスで検索してみると、(5)では説明できない例がいくつか見つかる⁽²⁾。第一に、全称量化詞に近いが、そうでない表現も許される、ということを示す例がある。(6)~(8)を見られたい。

- (6) In recent years, especially during the Clinton presidency, Washington signaled Beijing that the United States care about little except trade, and that American concern for human rights in China, for the oppressed Tibetans, for democracy in Hong Kong, for nuclear nonproliferation, is merely symbolic - [AtM 97a]
- (7) Except in childhood cancers and a few adult malignancies, chemotherapy alone rarely produces a five-year remission. [AtM 97a]
- (8) Instead the Republican Congress has been hell-bent on spending less for almost everything (except defense), while the response of the Clinton administration has been to fight hard for symbolic expenditures for a few more children here, a few more policemen there, and a few volunteers spread around everywhere. [AtM 96c]

(6)では全称量化詞ではないlittleが使われている。また、(7)ではrarelyはneverと違い全称量化の力は持たない。(8)にあるalmost everythingという表現はすでに例外を認めている表現であり、全称量化詞であるとは言えない。このような場合をどう処理するか、という問題がある⁽³⁾。これらの表現は全称量化詞にとっても近い。したがって、(5a)からかけ離れた解決を探る必要はないだろう。

第二に、except for が文中に現れる場合に付いて、Hoeksema (1987)によって指摘されている(9)-(11)がある。

- (9) a. Except for Richard, I am the only realtor here.
b. #Except for Richard, I am the realtor here.
- (10) a. Except for Margaret, the only realtor is Richard.

b. #Except for Margaret, the realtor is Richard.

(11) a. Except for Harry, Dick is the best friend you ever had.

b. Except for myself, you are the most degenerate of men.

((9)-(11): Hoeksema 1987: 109-110)

たとえば(9)では、地域に二軒しか不動産屋がない場合、onlyがつけば良いが、つかなければ解釈できなくなる。(9b)がおかしいのはあとで見るとして、疑問なのは、(9a)の場合は、the only realtor が引き算の対象なのだろうか、ということである。(10)も同様の疑問点がある。同じ事が(11a)のような最上級を使った例にも見られる。これは何から引き算しているのか、明らかなのだが、これまでの except for の例文と違い、出ていない。また、この(11)との関連で、but についてだが、(13)のような例も見える。(12)にあるように、but は except と似たような振る舞いをするわけだが、(13)では順序を示す(しかも全称量化詞ではない) last という最上級の形容詞が使われている。

(12) In the last six years, she had won every case but one... [Dark Lady]

(13) a. I saw the whole summit ridge and final peak of Everest unveiled. I noticed far away on a snow slope leading up to what seemed to me to be the last step but one from the base of the final pyramid, a tiny object moving and approaching the rock step. [M]

b. Apparently (and this may be no more than mischievous invention) Peter has already made a tape of himself commentating on the last Grand Prix but one, and what purports to be a transcript has reached us. [M]

明らかに順序集合からの引き算であり、これらもその観点から解決を試みたい。

2 先行研究の概観

2.1 Hoeksema 1987

本節ではHoeksema (1987)の研究を概観する⁴⁾。まず、(5a)のconnected exceptives は、基本的に引き算だとされている。引き算だという明確な分析を与えたのは、おそらくHoeksema (1987)がはじめてだろう。(14)を見られたい。

、(14) 引き算：

- a. [every student] – {John}
- b. Every student {except/but} John...
- c. Except for John, every student...

つまり、(14b)や(14c)は、全ての（当該文脈で関連する）学生の集合から学生であるJohnを引き算する働きをもつ、ということである。これを(14a)のような形で表すわけである。さらに、(5a)ですでに指摘されているように、(14b)や(14c)のeveryをnoに変えたものも、butやexceptでの修飾を許す。

- (14) d. No student {except/but} John...
- e. Except for John, no student...

では、everyとnoというふたつの数量詞が同時に満たすような条件とはなんだろうか。Hoeksema(1987)では、引き算の相手となる数量詞は(15)の三つの条件を満たさなければならない⁹⁾。

- (15) a. Left Downward Monotonicity: $(QAB \ \& \ A' \subseteq A) \rightarrow QA' B$
- b. Left Additivity: $(QAB \ \& \ QA' B) \rightarrow Q(AUA') B$
- c. Conservativity: $QAB \rightarrow QA(A \cap B)$ (Hoeksema 1987; 一部改変)

(15)はbut句やexcept句を許容するすべての数量詞が満たすべき条件である。(15a)のleft downward monotonicityとは、文の主語位置にある要素Aが、Aよりも細かい情報を伝えるA'によって置きかえられると、Aを含む文は、A'で置き換えた文を意味的に含意するということである¹⁰⁾。(15b)のleft additivityは、主語位置の要素Aを含む文と、主語位置の要素A'を含む文とをandでつなげた文を考えると、それはAとA'の和集合を主語位置に持ってきた文を意味的に含意すると言える、ということである¹¹⁾。(15c)のconservativityは、主語位置の名詞Aの表す集合と述語Bの表す集合との積集合をとると、これはAの部分集合となるが、このような場合、Aについて成り立つことは、 $A \cap B$ についても成り立つ、ということである¹²⁾。Everyとnoはこれらの条件を満たす。

これでvon Fintel (1993)に引かれている(16)のHornが指摘した分布が説

明できる。

- (16) Everyone but Mary Nobody but John
 Anyone but Carter *Somebody but Kim
 {All/*Most/*Many/*Three/*Some/None} of my friends but Chris
 (von Fintel 1993)

アステリスク(*)のついている数量詞は(15a)と(15b)を満たすことができない。従って、これらの条件は *except* などの *connected exceptives* と共起しない数量詞を排除する。そこで *connected exceptive* の一つとして *but* の分析は(17)になる。

- (17) $QAB \text{ but } c =_a Q(A - \{c\}) \ \& \ c \notin B$, for any left-downward monotone and left additive Q , and undefined for all other Q
 (18) All students but Jim are straight.
 a. all([student] - {Jim})
 b. {Jim} \notin [straight] ((17)~(18): cf. Hoeksema 1987: 104)

(18)では、ジム以外の全ての学生はまともなわけだが、ジムはまともではないということが意味的に含意されている。しかし、ジムが学生であることは意味的に含意されず、むしろグライス流の会話の含意であるとされる⁽¹⁰⁾。

さて、*free exceptives* はどうかと言えば、Hoeksema (1987)も、(19)のような例から、小西(1976)と同様、文修飾だと考えている。

- (19) a. #Except for this Cadillac, somebody damaged every car.
 b. Somebody damaged every car, except for this Cadillac.
 (Hoeksema 1987)

(19a)は(20)の *additivity* という条件をつけて排除され、(21)のような *except for* の意味を設定する。

(20) *Additivity*:

[except NP $S]_E$ is defined only when the following holds for $[S]$:
 $[S]_E = 1$ and $[S]_{E'} = 1$, then $[S]_{EUE'}$

(21) $[\text{Except a } S]_E = \text{True}$ iff $[S]_{E - \{a\}} = \text{True}$, $[S]_E = \text{False}$ and S is additive.

(20)については、Hoeksema (1987)では、次のような例が挙げられている。つまり、(22a)と(22b)から(22c)を導くことはできないが⁽¹¹⁾、(23a)と(23b)からは(23c)を導くことができる。総称表現と同じような振る舞いをするのでしられる固有名詞の場合も、このことは当てはまる。(24a)と(24b)から(24c)を導くことはできる。

- (22) a. Someone visited every city in the US.
 b. Someone visited every city in Canada.
 c. Someone visited every city in North America.
- (23) a. Every student has a car in the US.
 b. Every student has a car in Canada.
 c. Every student has a car in North America.
- (24) a. John visits every city in the US.
 b. John visits every city in Canada.
 c. John visits every city in North America.

((22)~(24): cf. Hoeksema 1987)

従って、everyがsomeよりも広い作用域を持っていないと、(20)が満たせず、当然(21)も満たせないので、(19a)はおかしい文になる、ということになる。(19b)が良い理由は、ここでのsomeoneがむしろ(24)のJohnのような振る舞いをしているからである、と考える。

ここで、(21)では、Eがuniverse of discourseのなかの個物の集合を示すので、例外となる[a]をそこから抜き出してしまう、ということになる。つまり、(25)を例にとると、個物の集合からJohnを抜き出してしまう、という操作である。しかしながら、これはvon Fintel (1993)によって反例が示されている。(26)では、Johnをuniverse of discourseから引いてしまうと、everyone likes Johnの目的語のJohnが解釈できなくなってしまうので、(21)は良くない、という。

- (25) Except for John, everyone attended the meeting.
 (26) Except for John, everyone likes John.

(von Fintel 1993; (21)に対する反例)

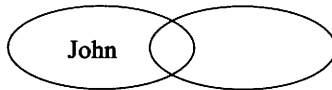
本節では、Hoeksema (1987)を概観したが、ここでは(26)のような例が問題になることが確認された。Von Fintel (1993)ではこれが解決されているので、次節で見ていきたい。

2.2 von Fintel 1993

上で述べたように、von Fintel (1993)は基本的にHoeksema (1987)の提案を受け入れたものである。従って、数量詞で示された集合からの引き算が、exceptivesの役割だと考えている。例えば、(27a)のような文では、会議の参加者と(当該文脈で問題となる)学生の集合は(27b)のように図示され、(27c)と(27d)のような含意が生じる。

(27) a. Every student {except/but} John attended the meeting

b. students "attenders"



(von Fintel 1993)

c. John is a student. (Hoeksema (1987)ではimplicature)

d. John did not attend the meeting. ((15)のHoeksema (1987)の " $c \notin B$ ")

さて、この含意が会話の含意(conversational implicature)であるかどうかはともかく、von Fintel (1993)のexceptの分析を(28)に示す。Von Fintelのここでの主張は、but や except などの connected exceptives の意味は、確かに全称量化詞で示される集合から例外を引き算することであるが、この例外が唯一のものであり、他に例外はないことを保証するということである。(対照的にexcept for などのfree exceptives はこのような例外の唯一性を要求しない。)そのような保証をしてくれる数量詞は全称量化詞しかないわけで、従って全称量化詞だけがbutの引き算の相手になるわけである。この分析に従った(29)に対応するヴェン図は下に示した。(28)でDは決定詞(determiner; 数量詞を含む)であり、決定詞のあとにくる名詞がA、例外はCで、Pは述語である。例えば、&の右側にある $\cap \{S|P \in D(A-S)\} = C$ は、つまり、述語で表される集合がその中に含まれるような集合で、しかもAからSを引いて決定詞で限定された集合をすべて考えると、そのSは例外を表す集合Cと同じである、ということである⁽¹²⁾。

(28) DA[but]C P=True

$$\begin{array}{l} \Leftrightarrow P \in D(A-C) \& \forall S [P \in D(A-S) \Rightarrow C \subseteq S] \\ \Leftrightarrow P \in D(A-C) \& \forall B [B \subseteq A \& P \in D(B) \Rightarrow C \cap B = \phi] \\ \Leftrightarrow P \in D(A-C) \& \bigcap \{S | P \in D(A-S)\} = C \end{array}$$

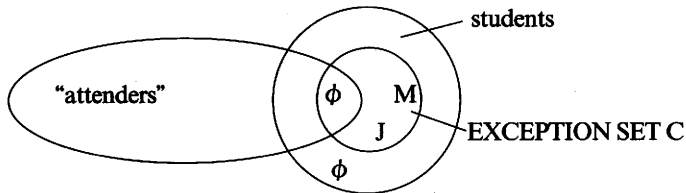
引き算

例外の唯一性

(von Fintel 1993)

(29) Every student but John and Mary attended the meeting.

(von Fintel 1993)



(von Fintel 1993)

つまり、von Fintel (1993)では、connected exceptionsは数量詞の定義域 (domain)に対する制限、つまりrestrictions on quantifier domainsとして機能し、connected exceptionsはそこに示されたものを唯一の例外として全称量化詞の定義域を制限する、ということになる。(28)の&の右側では、but句の例外は、全称量化の対象であるAから引くことの出来る例外の集合の内、一番小さいものである、ということが主張されている。さて、(28)の分析では、(30)~(32)のような場合が説明される。

(30) *Most students but Tom and John attended the meeting.

(31) Who but a total idiot would have said a thing like that?

(32) *Everybody but John and but Mary attended the meeting.

((30)~(32): von Fintel 1993)

たとえば、(30)では、most studentsだと、TomとJohn以外にもミーティングを休んだ学生がいる可能性を否定できない。例えば、もう一人の欠席者がHarryという名前だとすると、TomとJohn、TomとHarry、JohnとHarryの三つの集合が例外として考えられ、例外を示す集合が唯一的に決定できないことになる。また、(31)に示されるように、wh疑問文で

but句が使われると修辭疑問文になるという点も、答えが必ず no one などの全稱的な答えになるwh疑問文の解釈は修辭的なものしかないことから、説明されることになる。同様の議論から、(32)で示される2つのbut句を認めないことは明らかである。

さて、2.1節で紹介したHoeksema (1987)のいう free exceptive の分析に関しては、(26)で示した反論があった。Universe of discourse からの例外の引き算は認められない、ということであった。そうすると、引き算する相手はやはり名詞Aを表す集合だということになる。(もともと、except for が統語的には文修飾の付加詞(sentential adjunct)だということは von Fintel (1993)も認めている。)従って、except for の意味を(33)のように分析している。

$$(33) [\text{except for}]C, DA P=\text{True} \Leftrightarrow P \in D(A-C) \& P \notin D(A)$$

引き算 制限

(34) No one, except for the famous detective, suspected the cook.

(35) a. Except for Joan, most cabinet members liked the proposal.

b. Except for John, few employees accepted the pay cut.

((33)-(35): von Fintel 1993)

つまり、引き算の部分はbutと同じだが、&の右側の部分はD(A)の中にPは含まれない、つまり例外が存在する、という制限があるということである。これを英語の例文で説明すれば、(34)で、全員の集合から有名な探偵を引き算し、しかも、疑っていなかった人の集合が全員の集合には含まれない、つまり例外(=有名な探偵)が存在する、ということになる。なお、(35)で示すように、例外が唯一のものである必要がないため、most や few から引き算できる。むしろ、most や few の場合は、von Fintelに言わせると、例外があることを数量詞自体が認めていて、その例外をexcept for の句で説明している、というパターンであるということになる⁽¹³⁾。

2.3 Brisson 1997

2.2節の von Fintel (1993)の議論は非の打ち所がないが、さらにこの分析に有利なデータが Brisson (1997)で示されている。Connected exceptives は数量詞からの引き算であるが、(36)のデータを説明することにも役に立つという。

- (36) *The students but Donna played volleyball. (Brisson 1997)

The students のような定冠詞+複数名詞も通常は全称量化詞と同じような集合を示している。例えば(37a)の例を見れば分かる通りである。

- (37) a. The boys are hungry. (weaker)
 b. The boys are all hungry. (stronger)
 (38) The boys — in fact all the boys — are hungry. ((37)(38): Brisson 1997)

しかし、(37a)を、(37b)と比べてみると、同じ内容を表しているにもかかわらず、(37a)のほうがやや弱く、(37b)のほうがやや強い、ということが言える。Horn (1991)も言っているが、例外を許す表現から、例外を排除する表現への推論は成り立つが、これは(38)からも分かる。つまり、(37a)は例外を許すのに対して、(37b)は例外を許さない、ということが言える。(38)から、このような例外を許す解釈は、語用論的な現象だと分かるから、Brisson (1997)ではこれをPragmatic Weakeningという。さて、(37a)のような例は、(37b)とは違い、もともと例外を許すわけであるから、もしこれに but などの connected exceptives が付くようなことがあれば、but句で表される例外の唯一性の条件が保てなくなってしまうので、(36)は悪いのだ、ということになる。これなら von Fintel (1993)の分析に対するサポートになるわけである。

3 問題の検証

3.1 (6)~(8)の場合

さて、ここまでは完璧な von Fintel (1993)の分析だが、本稿の最初(1節)で挙げた(6)~(8)の例はどうであろうか。ここではひとつの方向性を探してみたい。以下に問題となる例の必要部分だけを繰り返しておく。

- (6) ...the United States care about little except trade,...
- (7) Except in childhood cancers and a few adult malignancies, chemotherapy alone rarely produces a five-year remission.
- (8) Instead the Republican Congress has been hell-bent on spending less for almost everything (except defense),...

じつのところ、von Fintel (1993)でもこのような例にはまったく注意が払われていないわけではなく、同論文の13番の註で(39)を挙げ、これは慣用的(idiomatic)だから関係ない、という。

(39) We had little choice but to comply. (von Fintel 1993)

また、これより一つ前の論文であるvon Fintel (1991)では、10番の註で(40)のように述べている。

(40) ...This [=uniqueness of exception with *but*] would also explain the fact that speakers do not object immediately to NPs like *almost all students but John* (Mats Rooth, p.c.). After closer consideration of what a phrase like that would mean its anomalousness [*sic*] becomes apparent however.
(von Fintel 1991: 502)

つまり、英語の母語話者は間違っ、(6)~(8)のような文を使ってしまうのだ、ということになる。Von Fintelの結論としては、例外を許す数量詞に *but* 句をつけるのは、慣用的な場合であるか、あるいは間違ったり、ルーズな言葉の使い方をしてしまった場合であるか、ということになる。なるほど、(8)では *except* が括弧に入っているの、後で思い直したような、まとまっていない感じを与える。おそらく(6)は慣用的だということになる。しかし、(7)はどうなのだろうか。これは特に間違いやルーズな用法のような感じも与えないし、慣用的な言いまわしでもないようである。

むしろこれは、(15a)のleft downward monotonicity(↓MON)という条件と考え合わせるべきものではないだろうか。というのも、通常のdownward monotonicity(MON↓)が、(41)に示されるように、成り立つのは明らかなのだから。

(41) John rarely runs. → John rarely runs fast.

もちろん、*rarely* が downward entailing (DE)な文脈を形成するということは、*rarely* は否定極性要素(NPI)を認可するということである。これは *little* にも言えることだが、*almost every...*には当てはまらない。*Almost*を含む文はNPIをライセンスしないことはHorn (1996)にも見える事実であ

る。そうすると、とりあえずalmost every...の(8)を除いて考えるほうがよさそうである。そこで、(42)のような仮説を立ててみる。

(42) except/butはNPIの出現を許す文脈で出現できるので、NPIの一種である。

すると、little や rarely のようなNPIを許容する文脈を作る言葉の中でexceptが出現する理由がわかる。たしかに、every は否定極性を持たないので、(42)はおかしいということになる。しかし、anyという一般的にNPIだと考えられている言葉は、(43)にあるように、every でも no でも現れる。これはもともと left downward monotonicity の特徴だが、(15a)で見たように、connected exceptives が引き算の相手になる数量詞に要求するのが left downward monotonicity である。

(43) a. Every sailor who accepted any of the girls perished.

b. No sailor who accepted any of the girls perished. (van Eijck 1991)

そうすると、(7)の rarelyもleft downward monotonic な文脈を作るのではないかと疑ってみることが出来る。英語の母語話者にインフォーマントになってもらって、rarely の推論を調べてみると、判断にはゆれがあるようである。例えば、(7)から(7')への推論を考えてみたところ、2人はよしとしたが、1人は不可とした⁽⁴⁾。

(7) Except in childhood cancers and a few adult malignancies, chemotherapy alone rarely produces a five-year remission.

(7') Except in childhood cancers and a few adult malignancies, intensive chemotherapy alone rarely produces a five-year remission.

もとよりこれはNPIに関するより詳細な研究を前提とすべき問題であり、本稿では解決をみることはできなかったが、これからの研究課題としたい。

3.2 (9)~(11)と(13)の場合

引き続き、最上級やonly、順序を表す last がついた(9)~(11)と(13)のような例を考える。以下に必要部分のみを再掲する。

- (9) a. Except for Richard, I am the only realtor here.
- (10) a. Except for Margaret, the only realtor is Richard.
- (11) a. Except for Harry, Dick is the best friend you ever had.
b. Except for myself, you are the most degenerate of men.
- (13) a. I noticed far away on a snow slope leading up to what seemed to me to be the last step but one from the base of the final pyramid...
b. ...Peter has already made a tape of himself commentating on the last Grand Prix but one...

まず、Hoeksema (1987)では、これらは基本的にNPIの ever のような要素と同様な context sensitivity を持つとされている。この提案に沿って考えてみると、Fauconnier (1979)で指摘されている implication reversal というものが参考になる。この implication reversal という現象はよく知られたものだが、簡単に触れると、(44)の最上級形容詞が any と同じように解釈されることがあり、肯定文の場合と違い、否定文では逆の意味を持つ形容詞の最上級を利用しなければならないので、reversal と言っているわけである。

- (44) a. Max cannot solve the simplest problem.
→ Max cannot solve any problem.
b. Max can solve the most difficult problem.
→ Max can solve any problem.

さて、これを引き起こす文脈は、(44a)の否定辞 not だけでなく、さまざまな文脈がある。Fauconnier (1979)から引けば、(45)のようになる。

- (45) a. If Max can solve the simplest problem, he will be rewarded.
b. It is harder to see this planet than it is to see the most distant stars.
c. Max is too stupid to solve the simplest problem.
d. Anybody who can solve the simplest problem is fit for this job.
e. He was executed before he could show the faintest sign of repentance.
f. Can Max solve the simplest problem?
g. Max was the only/first one to show the faintest sign of repentance.

(Fauconnier 1979: 291-292; 下線付加)

これらの文脈がNPIのeverを許容する文脈であることは、(46)を見れば明らかである。

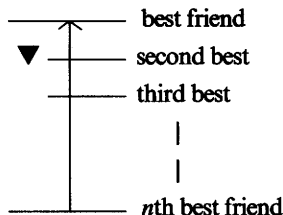
- (46) a. If Max ever works he will be rewarded.
 b. Alex works more than Max ever did.
 c. Max is too lazy to ever work.
 d. Anybody who has ever worked enjoys doing nothing.
 e. Before he ever works, Alex will try all other means of surviving.
 f. Did Max ever work?
 g. Max was the only/first one to ever work for Rockefeller.

(Fauconnier 1979: 292-293)

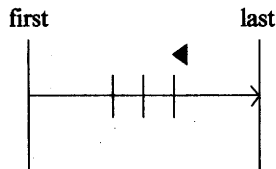
ここまでくれば話しは見えてきたと思うが、(9)(10)はこの路線で説明できる。(9)(10)の only の例は、(45g)や(46g)から明らかのように、もともとNPIを認可するDE文脈にあるので、exceptives は left downward monotonic な文脈を必要とし、except for が現れるのは予想できる。

しかし、これだけでは(11)や(13)は説明できない。やはり順序集合としての尺度というものを考えてみる必要があるようだ。例えば(47)のような尺度を考えてみる。(47a)では、まず、ベストフレンドというのを一番の人からn番の人まで順序付ける。そうすると、ベストの人は除かれるわけだから、2番目の人が残った中ではベストフレンドということになる。つまり、黒い三角のところより下を考えておけばいいという寸法である。この場合は、例外も唯一的に決定するので、except でも良いはずであるが、except の例は調べた限りでは見つからなかった。

(47)a.



b.

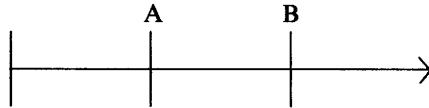


(47b)では矢印の最初 (= (47b)の左端) から最後 (= (47b)の右端) ままでが

順序付けられている。最後の要素を引き算して、最後より一つ前のところまでを考えるならば、たしかにこれが最後になる。これも明らかに例外の唯一性を保証できるので、but で良いわけである。どちらの場合にも、矢印の方向に注意が必要である。このような例では、尺度の上端(the upper end of a scale)のほうでは例外を許すが、尺度の下端(the lower end of a scale)では許さないようである。

このように見てくると、(45)や(46)の場合と同様、尺度が絡んでいることが分かる。これは筆者の知る限り今までまったく言われてこなかったことだが、尺度のような順序集合でも、例外の唯一性が保証される場合は、but が使われたり、except for が使われたりするということが言える。このような場合を形式化するには、不等号の形をした「<」記号を導入して、(28)を書きかえることになる。この記号を(48)のように定義しておけば、概略、(49)や(50)のような形式に纏めることができるかもしれない。

(48) $A < B$



(49) $DA[\text{but}]CP = \text{True}$

$$\Leftrightarrow P \in D(A^{\text{scale}} - C) \ \& \ \forall S [P \in D(A^{\text{scale}} - S) \Rightarrow C < S]$$

where D is a modifier that presupposes a scale, and A^{scale} is a scale associated with the expression A

(50) $[\text{except for}]C, DA P = \text{True}$

$$\Leftrightarrow P \in D(A^{\text{scale}} - C) \ \& \ \underline{P \notin D(A^{\text{scale}})}$$

where D is a modifier that presupposes a scale, and A^{scale} is a scale associated with the expression A

さて、(50)には瑕疵がある。それは下線の部分なのだが、このままだと、下に繰り返した(11)の文では、(11a)で、Harry はベストフレンドでなくなってしまう、(11b)では myself は最も放埒な人ではなくなってしまう⁽⁴⁵⁾。しかしながら、(11)はそれぞれ(51)のような含意が当然生じている。それを意味的なものとするにしろ、語用論的なものとするにしろ、(50)の下線部はこのような含意とは矛盾するので、(50)の下線部は削るしかない。(なお、これは von Stechow (1993)の結論に対する反論を形成すると思われる。(33)の「制限」とある下線部が制限としては強すぎるものが

示されたのだから、except for の統一的な意味論を設定することを目標とするならば、ここをやり直さなければならない。))

- (11) a. Except for Harry, Dick is the best friend you ever had.
 b. Except for myself, you are the most degenerate of men.

- (51) a. Harry is the best friend.
 b. I am the most degenerate of men.

- (52) [except for]C, DA P=True
 $\Leftrightarrow P \in D(A^{\text{scale}} - C)$, where D is a modifier that presupposes a scale,
 and A^{scale} is a scale associated with the expression A

しかし、これでは except for の意味としては不十分ではないか、と考えることもできる。少なくとも、先ほど指摘したように、尺度の上のほうからだけ引き算することが出来るのだから、それだけでも入れておかないと、例えば(53)のような文も可能と言うことになってしまう。日本語で考えても無理であろう。(53')に示したように、「私」が「あなた」より放埒な人間なら、「あなた」を除く必要は最初からないのである。

- (53) Except for you, I am the most degenerate of men (when I am more degenerate than you are).

- (53')#[私があなたより放埒な人間だとして] あなたを除けば、私よりも放埒な人間です。

それならば、(52)で、尺度上Cより上の要素はないということを保証しなければならぬ。そのために、(54)を提案する。

- (54) [except for]C, DA P=True
 $\Leftrightarrow P \in D(A^{\text{scale}} - C) \ \& \ \neg \exists S[C < S]$
 where D is a modifier that presupposes a scale, and A^{scale} is a scale associated with the expression A

つまり、下線を引いた部分は、except for の目的語で示されている例外よりも尺度上で上の要素は存在しない、というわけである。

4 まとめ

本稿では例外を表す *except*, *but*, *except for* の意味を考察してきた。1節で問題提起をし、全称量化詞からの引き算でしか現れないはずの *except* や *but* がそうでない文脈で現れる場合や *except for* が最上級形容詞を含む文の中に現れる場合に付いて、考察することを目標とした。2節では先行研究を概観し、全称量化詞の定義域のみが唯一的な例外を保証するのだということを見た。3節では、先行研究に対する反例となりうる例を検証し、3.1節で(6)~(8)の場合を考察し、NPIと *left downward monotonicity* とが解決の糸口らしいところまで考察したが、それ以上は結論できなかった。続く3.2節で(9)~(11)と(13)の場合を考察した。ここでは尺度を使った解決法を目指し、ある程度の形にはなったが、これからさらに検証して行かなければならない結論でしかない。しかし、ここで(50)のような解決法が不十分だと示すことによって、von Fintel (1993) に対する反論を行えたのは、それなりに有意義であったかもしれない。

註

* 本稿は2002年6月23日に神戸・六甲の六甲道勤労会館で行われた六甲英語学研究会で口頭発表した原稿を、表現のみ変更して、その後しらべたことを一部取り入れてまとめたものである。発表のときに、厳しくも親切なコメントを下された児玉徳美先生、菅山謙正先生、柏野健次先生、内田聖二先生、熊谷正先生、そして司会をつとめて下さった田中廣明先生に感謝申し上げたい。時間不足、筆者の力不足で、頂いたコメントを十分に生かすことができなかったのは残念である。本来、例外表現は、もともと例外を許容する表現（たとえば *most* や *almost*）と相補的な分布をなすものであり、その点で筆者は興味を持ったのだが、そういったさらに大きな問題に取り組むときに、頂いたコメントを生かしていければと思っている。

なお、今回は締め切り直前まで気がつかなかったのだが、Lappin (1996)も *except* などを扱っている。

- (1) この事実は、最近では von Fintel (1993)によって分析されている。彼の分析は2.2節で紹介する。ちなみに、von Fintel (1993)では、このような例外表現のことを *exceptive construction* と呼んでいる。以下でも *exceptive* という言葉を用いることがある。
- (2) ここで(6)~(8)や、(12)(13)では日本学術振興会研究員の森田省氏（筑波大学）が収集したコーパスを利用している。記して感謝する。例文の最後に [] で記されているのは、森田氏のコーパスのファイル名である。また、例外表現は下線で示した。なお、検索ソフトは浜口崇氏による「コーパスウィザード」を使用している。
- (3) なお、(6)~(8)の例は2.2節で紹介する von Fintel (1993)の分析に対する反論を形成する。
- (4) Hoeksema (1987)の以下の分析は、後述の von Fintel (1993)にも修正を経て引き

継がれる。

- (5) ここでQは数量詞(Quantifier)で、Aは主語、Bは述語と考える。
 (6) Left downward monotonicityという概念になじみのない読者のために、van Eijck (1991)にある例を挙げる。たとえば、(i)と(ii)において、(a)文が真であれば、(b)文も必ず真になる。

- (i) a. All sailors perished.
 b. All adventurous sailors perished.
 (ii) a. No storytellers talked.
 b. No entertaining storytellers talked. (van Eijck (1991: 469))

(a)文に比べて(b)文は主語位置の名詞に修飾語がついているので、(b)文の主語の表す集合は(a)文の主語の表す集合の真部分集合を構成する。ところが、(a)文は(b)文を意味的に含意するのである。All や no の部分を some に変えてみればわかるが、このような含意関係は some では成り立たない。

- (7) Left additivity について、ここでも例をひとつ考えれば、中性の人間がいなければ、(i)から(ii)への推論が成り立つということである。

- (i) {Every/No} male student attended the meeting, and {every/no} female student attended the meeting.
 (ii) {Every/No} student attended the meeting.

数を含む数量詞はこのような推論を許さない。Two male students attended the meeting and two female students attended the meeting から、Two students attended the meeting への推論が成り立たないのは明らかだろう。

- (8) 周知のように、conservativity は多くの数量詞が持っている性質である。たとえば、(ia)は(ib)を意味的に含意する。

- (i) a. Most students passed the test.
 b. Most students were students who passed the test. (Sher (1996: 527))

あるクラスで、ほとんどの学生が試験に合格すれば、ほとんどの学生の集合は試験に合格した学生の集合と同じである。したがって、most は conservative な数量詞だといえる。同様のことが every や no に関してもいえる。この conservativity のよく知られた例外は only や mainly のような数量詞の振る舞いをする副詞である。(van Eijck (1991: 466))

- (ii) a. Only fishermen survived.
 b. Only fishermen were surviving fishermen. (van Eijck (1991: 466))

(iia)では、生き残ったのが漁夫だけなのであって、生き残らなかった漁夫もいる可能性を排除していないのに、(iib)では漁夫の集合は生き残った漁夫の集合と同じであると主張している。(iia)から(iib)への推論は行えず、したがって意

味的含意はないので、only は conservative であるとはいえない。

- (9) Horn (1989: 346)を参照のこと。
- (10) Hoeksema (1987)はさらに内包論理で NP-modifier として but句を考えているが、ここは考えなくても議論には支障がないので、本稿では割愛する。
- (11) もちろん、(22a)の someone と(22b)の someone とは別の人物である可能性があるからである。
- (12) 例を挙げれば、Every student except John attended the meeting では、John を学生の集合から抜いた集合を考えて、決定詞によってその集合を限定する場合、Johnが例外に当たるので、John が唯一の例外である、ということを行っているのである。
- (13) 全称量化詞を使わなかったことからの scalar implicature だと考えられている。つまり、<no, few>のような Horn scale を考えれば、few を使い、その左の no を使わなかったので、no とはいえない、つまり全員がやらなかったとはいえない、ということである。
- (14) (7)から(7)への推論に関して、本学の英語を母語とする教員の3人のアメリカ人から有効な回答を得た。それによると、一人は、chemotherapy は intensive chemotherapy とは同じものではないので、そのような推論は成り立たないとする。推論が成り立つとした他の二人のうち一人は、chemotherapy はすべて intensive chemotherapy であるということであったし、もう一人は(7)のような文脈では intensive という言葉があまり重要でないので intensive chemotherapy を chemotherapy と同じとみなしている、ということであった。アンケートにお答え下さったのは、本学の James B. Brown 先生、C. Joy Williams 先生、Mary T. Hughes 先生である。記して感謝したい。
- (15) 念のために説明しておく。(50)の下線部 $P \notin D(A^{=})$ が言っているのは、尺度上のすべての要素の集合の中に述語が表す集合を含むことはないのだから、たとえば Harry を含んだすべての友達の集合を考えると、ベストフレンズの集合はそのなかに含まれないことになり、Harry はベストフレンズでないことになってしまう。同様に、myself を含んだすべての人間の集合を考えると、人間の中で最も放埒な人間の集合はその集合に含まれないことになるので、myself は最も放埒でないことになってしまう。いうまでもなく、Harry はベストフレンズであり、myself は最も放埒な人間であるから、このような議論は成り立たない。

参考文献

- Brisson, Christine. (1997) 'On definite plural NP' s and the meaning of *all*.' In: Lawson, Aaron (ed.) *SALT VII*, 55-72.
- Fauconnier, Gilles. (1979) 'Implication reversal in natural language.' In: Guenther, F., and S. J. Schmidt (eds.) *Formal Semantics and Pragmatics for Natural Language*, Reidel, Dordrecht, 289-301.
- Hoeksema, Jack. (1987) 'The logic of exception.' In: Millers, A., and J. Powers (eds.) *ESCOL* 87, 100-113.
- Horn, Laurence. (1989) *A Natural History of Negation*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Horn, Laurence. (1991) 'Given as new: when redundant affirmation isn't.' *Journal of*

Pragmatics 15, 313-336.

- Horn, Laurence. (1996) 'Exclusive company: *Only* and the dynamics of vertical inference.' *Journal of Semantics* 13, 1-40.
- Israel, Michael. (1997) 'The scalar model of polarity sensitivity: the case of the aspectual operators.' In: Forget, Danielle, et al. (eds.) *Negation and Polarity : Syntax and Semantics : Selected Papers from the Colloquium Negation—Syntax and Semantics, Ottawa, 11-13 May 1995*. Benjamins, Amsterdam.
- 小西友七. (1976) 『英語シノニムの語法』 研究社, 東京.
- Lappin, Shalom. (1996) 'The interpretation of ellipsis.' In: Lappin (ed.) (1996).
- Lappin, Shalom. (ed.) (1996) *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*. Blackwell, Oxford.
- Sher, Gila. (1996) 'Semantics and logic.' In: Lappin (ed.) (1996).
- Von Stechow, Armin von, and Dieter Wunderlich (eds.) (1991) 'Quantification.' In: Von Stechow, Armin von, and Dieter Wunderlich (eds.) *Semantics: An International Handbook of Contemporary Research*, 459-487.
- Von Fintel, Kai. (1991) 'A semantics for exception phrases.' In: Bates, Dawn (ed.) *WWCFL* 10, 493-504.
- Von Fintel, Kai. (1993) 'Exceptive Constructions.' *Natural Language Semantics* 1, 123-148.